俳句と音楽

旭川市医師会
今本内科医院　今　本　衣　女（千衣子）

コロナ禍でステイホームと言われて久しいのですが、そもそも職住が一緒の開業医である自分にとっては、それまでの日常がすでにステイホームであることに気が付きました。

一階が仕事場の診療所で、自分の住まいは二階です。通勤の必要はありません。しかし、新型コロナ流行で、診療終了後の過ごし方は大きく変わりました。

不要不急の外出は控えましょうとの提言後、それまでスケジュール表を埋め尽くしていた多くの会議や研修会・講演会は、軒並みすべて中止となりました。ある意味では、それまでいかに多くの無駄にも近い会議や活動があったのかということに気付く日々でもありました。

最初の数ヵ月は、先の読めない日常診療、日々コロナ感染リスクに晒されて、フェイスシールド、マスク、そして発熱患者さんの検査には完全PPE、ものものしいいでたちで臨んでいました。多くの発熱患者対応にも追われ、日々の診療が終われば、ただただ、倒れこむようにベッドに横たわる毎日でした。部屋の中で布団にくるまっている自分に『いいのか、これで？』と、自問自答、このままでは免疫力が低下して、自分が内部から壊れていくのではないか、と痛切に思いました。

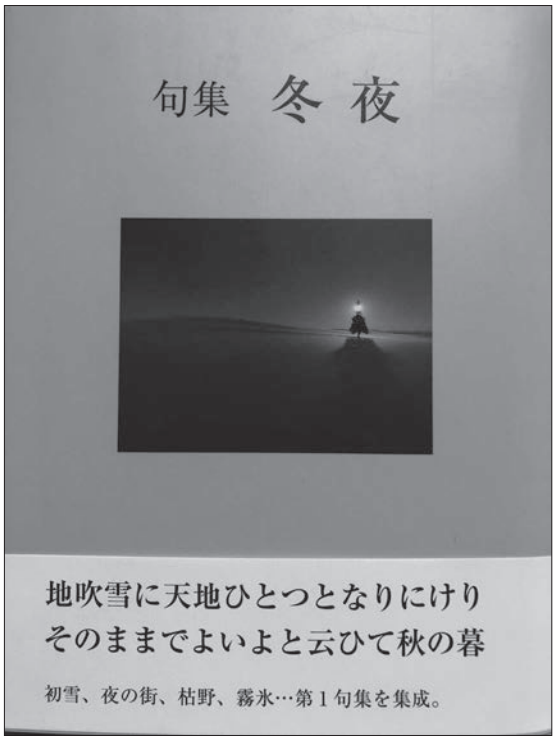
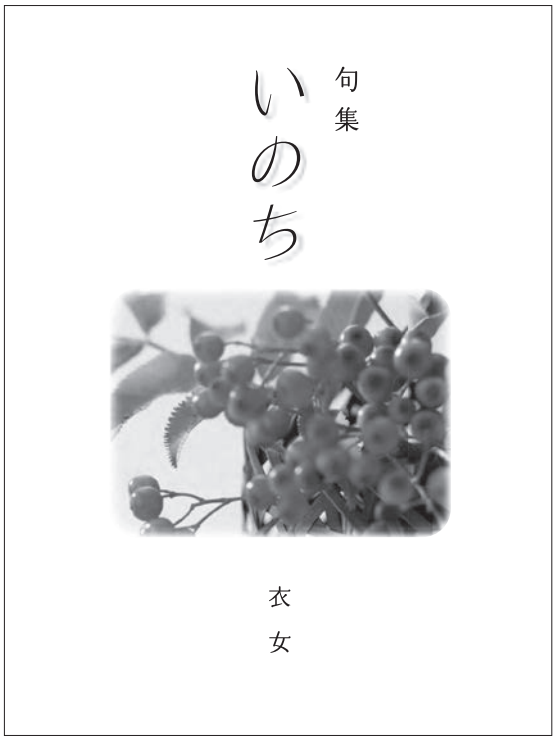
本当に見えない脅威は、外ではなく、自分の内側にあると思いました。

今だからこそ、見失ってはいけない、大事なものがあることに気付き、自分が大切にしているものにゆっくりと向き合う時間が、ある意味では、ギフトのように思えました。

自分が若いころから親しんできた曲を、もう一度楽しみながら演奏できる喜びにも立ち返ろうと、しばらくぶりで埃のかぶったグランドピアノの蓋を開けました。

音の世界、そこには静寂があって、その静寂の中で、音の世界は、生き生きと息づく世界そのものとなります。自然の声も心にしんみりと響きます。音の世界と俳句のランデブーです。

ワルツ弾く子犬もそばに春の暮
花曇ため息耳に暮れすすむ
プレリュード時の過ぎ行く五月雨
送り梅雨看取りの朝ショパン弾く
夏館スケルツォの音もれ聞こへ
夏の雨祭花火の空遠く
遠雷やプロコフィエフに魅せられて
秋初め田園ソナタ奏でけり
初もみじショパンバラード白昼夢
ノクターンひとり静かに夜半の月

第１句集『冬夜』後の５年間の集大成として第２句集『いのち』をステイホーム中のこの夏に上梓しました。

ぜひ、機会がありましたら手に取っていただければ幸いです。